

役割語の観点を取り入れた授業デザイン

—学習者が理想とする日本語話者を養成するために—

Designing a Course Based on “Role Language”:

Leveraging Role Model Tendencies of Non-Native Language Learners

金庭久美子(立教大学)・丸山千歌(同)・栗田奈美(同)・池田伸子(同)

KANENIWA Kumiko, MARUYAMA Chika, KURITA Nami, IKEDA Nobuko(Rikkyo University)

要 旨

筆者らは英語による経営学修士課程に在籍する学生を対象に日本語教育を行い、その成果の一端を栗田他(2013)で示してきた。このエグゼクティブ・ビジネスパーソン養成に特化した教育はまさに役割語の教育に通ずるものがあった。本研究では、役割語の観点を取り入れた授業デザインを紹介し、体験型セッションにおいて共有した結果、授業デザインにおいて従来にない要素が盛り込まれ、日本語教育の新たな指導法を見出すことができた。

This study demonstrates a non-conventional teaching approach based on our "Role Language" approach. The authors have developed unique Japanese language courses for the students of an English based MBA program. These specialized courses and training methods designed for the development of future business leaders clearly show the efficacy of our original "Role Language" system. This study highlights the experimental course design integrating "Role Language" methodologies and the heretofore unseen positive results of the practical application of such methods.

【キーワード】 エグゼクティブ・ビジネスパーソン, 役割語, ロールプレイ

1. はじめに

近年、金水(2003)をはじめ、役割語について議論されている。金水(2003:205)は、ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等)を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼んでいる。定延(2011:126)は、役割語を用いる発話キャラクターには「私たち」タイプと「異人」タイプがあることを指摘し、「私たち」タイプのように現代日本語共通語社会の住人の発話キャラクターがあるとした。「私たち」タイプは、「品」「格」「性」「年」等によって役割語の使い分けをしている。本研究は、定延が示したような「私たち」タイプの役割語が使えるようにすることを目指すものである。

発表者らは英語による経営学修士課程(以下MBA)の依頼に応じて、将来の企業幹部候補者のための日本語教育を行い、その成果の一端を栗田他(2013)で示してきたが、エグゼクティブ・ビジネスパーソン養成に特化した教育はまさに「役割語」の教育に通ずるものがあった。状況に応じた日本語を使うためには、自分になりたい日本語話者を想定し、役割語を考慮した練習を行うことが、今後の日本語教育の方法として必要なのではないかと

思われる。そこで、本稿では、まず、立教大学における役割語の観点を取り入れた授業デザインを紹介する。次に2014年度実践研究フォーラム体験セッションの参加者によって考えられた授業デザインを概観する。そして、役割語の観点を取り入れた授業デザインの応用の可能性と課題について考察する。

2. 立教大学における授業デザイン

2-1. 立教大学における授業デザインとは

本研究の対象は、MBA課程に在籍する将来の企業幹部を目指す日本語学習者である。このコースでは、キャンパス日本語ではなく、企業幹部として適切にふるまうための日本語を目指すという学習目標を設定した。そこで、コース全体を擬似ビジネス環境とし、学習者は仮想のデザイン会社「MIBカンパニー」の社員として、上司と社内会議を行ったり顧客とポスターについての商談を重ねたりしながら契約を獲得するというストーリーの上で、教室活動を行った。図1に授業デザイン全体を示す。

図1 立教大学における授業デザイン



このコースは、2013年4月～7月の週5コマ、14週間にわたって行われ、途中6回のゲストセッションを行い、元ビジネスパーソンの日本人6名を迎え、疑似ビジネス環境（商談や会議）を体験させた。それに向けた練習として、朝のロールプレイ（10分）、ゲストセッションに向けた会話練習（70分）、帰りのロールプレイ（10分）などの活動を行った。ゲストセッションに向けた練習では、身なりや立ち振る舞いなどの非言語行動をはじめ、日本語の発話行動において、いかなるビジネスシーンでもエグゼクティブ・ビジネスパーソンとして対応できるように、学習者の理想とする「自分」を想定させ、練習を行った。

2-2. 受講者

このコースの受講者は、英語による経営学修士課程（MBA）に在籍し、本学のプレイスメントテストにより中級前半レベルと判定された大学院生で、国籍（地域）は、中国、台湾、香港、オーストラリア、インドネシア、タイ、各1名である。

2-3. クラス活動

2-3-1. ゲストセッションに向けた会話練習

ゲストセッションに向けた会話練習では、モデル会話を示し、会議や商談のための表現の導入、練習、確認、予行練習などを行った。その際、台詞が正確に言えるようになるまで練習をさせた。

2-3-2. ゲストセッション

ゲストセッションの概要は表1に示すとおりである。学習者はMIBカンパニーの社員の役割を担うが、ゲストは上司になったり顧客になったりする。また、1回のセッションで

は、学習者は3つの異なるゲストグループと接触し、同じ内容の社内会議を3度繰り返す。

表1 ゲストセッションの概要

	活動内容	ゲストセッションでの学生の役割	ゲストセッションでのゲストの役割
第1回	商談①（顧客のニーズ聞き取り）	MIBカンパニー社員	立教大学職員（顧客）
第2回	社内会議①（ポスター第一案検討）	MIBカンパニー社員	会議出席者（上司）
第3回	商談②（プレゼン：ポスター案提示+新たな提案）	MIBカンパニー社員	立教大学職員（顧客）
第4回	社内会議②（ポスター最終案・提案書検討）	MIBカンパニー社員	会議出席者（上司）
第5回	発表会（自社紹介）	起業家	新聞記者・雑誌記者
第6回	ロールプレイのまとめ/座談会	会社員	同僚・上司等

2-3-3. ロールプレイ

朝のロールプレイ、帰りのロールプレイでは、ビジネス場面のロールカードを用意し、「天気について問う」「お土産の礼を言う」「出張の挨拶をする」、など、朝と帰りのそれぞれ100種のロールカードを用意し、毎回異なる活動を行った。表2にロールカードの例を示す。

表2 ロールカードの例

NO.	分類	ロールカード	文の型
1	お礼を言う	あなたは、昨日同僚に旅先のお土産（食べ物・置物）をもらいました。朝同僚に会ったので、お土産のお礼を言って下さい。	単文
2	断る	朝会社に行く途中で同僚に会いました。同僚が話しかけてきましたが、会議があって急いで行きたいので断ってください。	複文
3	断る	朝会社に行く途中で同僚に会いました。同僚が話しかけてきましたが、客と約束があって急いで行きたいので断ってください。	複文
4	話題：帰国	1週間休暇をもらい帰国しました。ひさしぶりに出社し、朝同僚に会いました。どうだったか聞かれたので答えてください。	段落

2-4. 分析資料

本研究では、ゲストセッションの様子を録画、ロールプレイの様子を録音している。ゲストセッションでは、本場さながらにビジネス上のやりとりが行われるが、学習者がその中でどのような対応をしているのかを見ることにした。学習者それぞれのデータを分析対象とし、ゲストと学習者の言語面を文字化し、1回のセッションに行われる3つのグループとの対応を比較することで、特に変化が見られた箇所について抽出することにした。

2-5. 結果

データを分析した結果、学習者はコース開始時はビジネス環境を意識した発話できなかったが、ゲストとのやりとりにより、企業内教育（On the Job Training: OJT）を受けながら、自分のなりたいビジネスパーソンをイメージして、対応するという学習者の自発的な学びが観察された。

ゲストセッションでは1) 複数回行うことで流暢さが増したこと、2) ゲストの反応に

ヒントを得て、談話の構成に改善が見られたこと、3) ゲストとのやりとりから気づきを得、新たな談話を構築したこと、などが観察された(栗田他 2013)。

特に「3) 新たな談話の構築」について、以下、金庭他(2013)より例を示す。

学習者C(インドネシア)は1回目の時の説明が十分ではなかった。その結果、ゲストとの間に例1に示すようなやりとりが行われた。

例1 <1つ目のグループのときの学習者Cの発話に対するゲストとのやりとり>

ゲスト：^{わたくし}私、あの、えー、この、立教と言うと、

まあこの、本館の、あの、非常にイメージいいんですけれども、(C:はい。)チャペル、まあ、これ、チャペルの中の写真、これを入れるか入れないかっていうのは考えましたか。

C: えーと、チャペルの、えー、写真なんです、えー、教会というイメージはしたので、(ゲスト:はい。)特に、えー、neutralのイメージをしたいと思います。できれば、えー、教会のイメージがあったら、そこに授業とかあったらいいかと思います。

ゲスト: その、例えば、授業のふう、あの、風景、(C:はい。)立教の、まあ、象徴的なチャペル、それから、まあ、皆さん、和気藹々と、えー、たの、まあ、こう、楽しんでいるところと、あると思うんですけども、順番から行くと、何が一番大切だと思いますか。

C: えーと、このポスターから「学び直し」と「仲間づくり」なんです、あの、一番は「学び直し」と思っております。

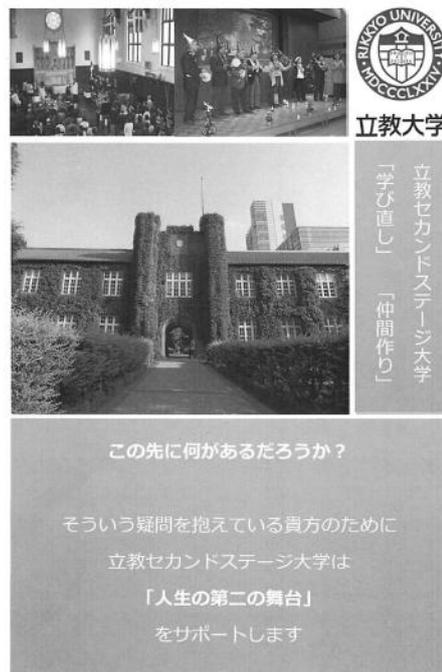
ゲスト: はい。そうすると、授業の風景が一番重要ですか。優先順位を、こう、つけるとするなら。

C: 大学としては、えー、「学び直し」の方がいいと思って。

ゲスト: じゃ、二番目(指で示す)は何ですか。

C: 二番目はその「仲間づくり」。楽しい(ゲスト:ほおお。)大学生活…はい。

(以下続く)



上司役のゲストは、写真やキャッチコピーの情報や優先順位の説明を学習者Cに求めたのではないと思われる。このやりとりの中で、学習者Cは実は「人生の第二の舞台」のほかに、「学び直し」や「仲間作り」の説明の必要性に気づいたと考えられる。

例1で行われたようなやりとりは、他にも複数見られ、最終的にゲストから例2のような質問が見られた。

例2 <1つ目のグループのときの学習者Cのポスター説明に対するゲストの質問>

質問1: 立教カラーっていうと、何、何の色なんですか。

質問2：(キャッチコピーは) 順番から行くと、何が一番大切だと思いますか。(例1)

質問3：写真は、2つの案、3つの案、ありますけども、2つと3つ、何がいいですか、どっちがいいですか。

質問4：何が一番いいかと、一番重要なものを、大きくすればいいような気がするんですけども、どうですか。

1つ目のグループのゲストから受けた質問を考慮し、学習者Cは、2つ目のグループに対する説明では、新たな談話(例3)を構築し、よりわかりやすい説明を行った。

例3 <2つ目のグループのときの学習者Cの発話>

C: 次は私のポスターです。えー、キャッチコピーなんですけど、「この先に何かあるだろうか。人生の第二の舞台」と「60歳を迎えるあなたに、えー、第二の人生はまだ始まったばかりです」というのは、えー、人生の始まりなんですけど、①写真は立教大学の本館を使い、道というイメージを表したいと思っております。これからはまだ、えー、何か立教大学としてもある(…?)です。次は、えー、②今回のポスターのコンセプト「学び直し」と「仲間づくり」を2つ小さい写真で表したいと思っております。③大学の紫色はロゴで、えー、ロゴで表したいと、えー、立教大学の文字で、これは立教大学、ちゃんとした、えー、④ぱっと見ると、ちゃんと立教大学をわかるように、大きい文字で、えー、載せています。あとは、⑤背景の色はピンクにして、女性、えー、アピールするようにしたらいいではないでしょうか。えーと、ご意見はありますでしょうか。

下線は、例2のやりとりの質問を反映した箇所である。まず、①では、「人生の第二の舞台」と「人生はまだ始まったばかり」というキャッチコピーとポスターの中央を占める大きい写真(大学の本館の写真)との関係を示している。次に、②では「学び直し」と「仲間作り」というキャッチコピーと写真の関係を示し、③では立教大学のカラーの質問を受けたことから、ロゴがその色であることを示している。さらに、④では一番重要なものを大きくするというゲストの助言をもとに、立教大学の文字を大きくしたことを伝えている。⑤の背景の色のピンクが女性へのアピールであることについては、1つ目のグループでは最初に伝えていたが、例3では談話構成上最後の部分となっており、やりとりをもとに伝達情報の優先順位を考慮したのではないかと考えられる。

上司役のゲストが問題の箇所の訂正を強く要求するのではなく、部下に接するかのように、学習者が発話した内容上の問題点を問答というやりとりの中で気づかせ、その結果、学習者Cはそれを次のセッションで生かしている。このようなやりとりは、通常の日本語クラスの教室活動では生まれにくいと思われる。ゲストは上司としての役割を担い、学習者Cは上司の指導を受けた部下という役割になりきっているように感じられた。

このような例から、学習者が理想とする話者モデルを想定し、それを実現するための疑似環境におくことによって、自分の理想の日本語話者モデルを実現する糸口が見出せるのではないと思われる。

3. 役割語を意識した授業をデザインする

3-1. 役割語を意識した授業デザインとは

本研究が提案する「役割語を意識した授業デザイン」は、コース全体を仮想の企業、仮想の病院、仮想の学校、などとし、コース全体をストーリー仕立てにするものである。その中で学習者が理想とする日本語話者を作り上げていく。ただ日本語を正しく話すのではなく、その状況にふさわしい役を演じられるかを重視する。例えば、病院を想定したストーリーで、入院患者に接する場面を想定するなら、学習者が看護師として、「どこか痛いところはありますか」と尋ねる場合、優しい感じに言うのか、威厳のある雰囲気と言うのかまでを指導の対象とするということである。

次節からは、体験セッションにおいて実際に参加者が作成した授業デザインを紹介し、このデザインの応用の可能性と課題について考察を行うことにする。

3-2. 体験セッション

体験セッションでは、次に示す手順で作業を行い、授業をデザインした。

まず、想定される場所、ストーリー、人物を考える。次に、そのストーリーを構成する場面の一つを選び、モデル会話を作成した。そして、モデル会話が自然な形で演じられるようなタスクを考え、ロールカードを作成した。さらに、各グループが作成した授業デザインをポスター発表形式で発表し、情報の共有を行った。最後にこの授業デザインにおける効果と問題点、留意点について話し合いを行った。

3-2-1. 授業デザイン：場所、ストーリー、人物

授業デザインでは、その活動が行われる場所とストーリー、及び、その場の学生が理想とする人物を想定した。

まず、本研究における例といくつかの例を示し、参加者に想定する状況を伝えた。

本研究の例

デザイン会社「MIB カンパニー」の数ヶ月を追ったストーリーで、エグゼクティブ・ビジネスパーソンの社員を演じる。

その他の例

1) 理系大学の1年間を追ったストーリーで、非常に品行方正であり、後輩にも専門について教えられる知識がある学生を演じる。

2) 和菓子屋でのアルバイトの1ヶ月を追ったストーリーで、接客マナーのよいバイト生として日本の和菓子文化の理解を深める大学生を演じる。

3) 老人介護施設の3ヶ月を追ったストーリーで、優しい口調だが行動はてきぱきとしている介護士を演じる。

参加者が想定した場所、ストーリー、人物は表3に示す通りである。

表3 参加者による授業デザイン（その1）

グループ	場所、ストーリー、人物
A	6か月の交換留学生（男性）。日本人学生と仲良くなるまでのストーリー
B	起業家。ビジネス交流会に参加し、そこで知り合った人に投資してもらいたい

C	就職活動を行っている女子大学生の6カ月を追ったストーリー
D	日本の金型工場で働く技能実習生で上司の指示をよくきいて理解する慎重でまじめな20代前半の男性の3カ月を追う
E	中国人専門の旅行会社で、一つのツアーを企画してから添乗が終了するまでの新卒添乗員の奮闘を描く
F	ゼミ長の1年間を追ったストーリーで、ゼミを円滑に運営することのできるゼミ長を演じる
G	就職活動中の大学生。アルバイトと就活の両立に努めている
H	アルバイト歴2年の大学生。寿司デリバリーのバイトリーダーに抜擢されたばかり。バイト生をまとめるリーダーシップのあるリーダーを演じる
I	テレビ局の敏腕プロデューサー。視聴率低迷を打開する

3-2-2. 授業デザイン：モデル会話

次に、想定したそれぞれの話者がよく使うと考えられる話し方や表現を検討し、暗記しておけば将来的に有効に使えるであろう台詞を盛り込んだ、モデルとなる会話を作成した。

本研究において示したモデル会話の教材は以下の通りである。

本研究のモデル会話例

(他社訪問－ニーズ調査)	
A	お待たせしました。
B	本日はお忙しいところ、 <u>a. お時間をお取りいただき</u> 、ありがとうございます。
A	こちらこそ、わざわざ <u>b. おいでいただき</u> 、ありがとうございます。
B	さっそくですが、 <u>c. 先日のポスター</u> の件につきまして、お話を伺わせていただければと思ひまして 代入練習
(1)	a. お時間を取っていただき b. お越しいただき c. 来月の展示会
(2)	a. お時間をお取りいただきまして b. 来ていただいて c. 新製品のコマーシャル

上記の場合、「将来的に有効に使えるであろう台詞」というのは、ビジネスシーンでよく使うと思われる「お時間をおとりいただき、ありがとうございます」というフレーズである。自分の置かれた役割においてこのような表現が必要な状況でうまく使えれば、非常に役に立つと考えられる。そこで、このような表現がモデル会話に盛り込まれるように参加者に助言した。

参加者によるモデル会話に見られたフレーズの一部を表4に示す。

表4 参加者による授業デザイン（その2）

立場	モデル会話に見られる表現
A 学生	(日本人学生に声をかける) ここ、空いていますか。
B 起業家	(投資家に説明する) お見せするほどのものではありませんが
C 就活の学生	(就職課の担当者に質問する) メールでもお伝えしたんですが
D 研修生	(金型工場の上司にお礼を言う) どうもお手数おかけしました。
E 添乗員	(バスの運転手に依頼する) 無理は重々承知なのですが…
F ゼミ長	(居酒屋の店主に依頼する) そこをなんとかか…
G 就活の学生	(OBに依頼する) ご苦勞が多いと思いますが、もしよろしければ…
H バイトのリーダー	(バイト先の店長に詫げる) 把握してなくてすみませんでした。
I プロデューサー	(ゲストに依頼する) 単刀直入に申します。

3-2-3. 授業デザイン：ロールカード

本研究において、授業の中に朝のロールプレイや帰りのロールプレイの時間を設けたのは、ビジネスにおいて商談や社内会議などの「仕事」における言語行動に加え、同僚や上司と交わす雑談レベルの言語行動があり、雑談レベルの言語行動も人間関係を構築する上で有効な機能を持つという考えに基づくためである。覚えた台詞が自然に使えるようなタスクを考え、さまざまな状況を想定し、複数のロールカードを作成する。

本研究のロールカードの例

あなたは会社の専務です。朝、廊下で会った清掃員に話しかけて、掃除のお礼を言ってください。

参加者が作成したロールカード(一部)の内容の概略を表5に示す。ポスター発表の際、表5のロールカードを用いてロールプレイの実演を行ったが、与えられた役割に対する発話を考慮するだけでなく、立ち振る舞い、表情といった非言語行動まで留意するグループも見られた。

表5 参加者による授業デザイン(その3)

立場	ロールカードの概略
A 学生	話したことのない日本人に声をかけ、食事に誘う。
B 起業家	投資家に自分の商品を説明する。
C 就活の学生	就職課の担当者にエントリーシートの確認を依頼する。
D 研修生	上司にタイムカードの押し間違いについて尋ねる。
E 添乗員	レストランのオーナーに予約していた料理の変更を依頼する。
F ゼミ長	居酒屋の店主に対し新年会の交渉を行う。
G 就活の学生	OBに会社の様子や仕事について尋ねる。
H バイトのリーダー	社員に自分がバイトAに対しどう対応するのか伝える。
I プロデューサー	ベテランキャスターに番組への出演を依頼する。

3-2-4. 体験セッションにおける話し合い

最後に、各グループで作成した教材をもとに、理想とする日本語話者モデルに近づくためにすべきことは何か、教材作成のための問題点は何か、について議論を行った。

参加者からは、ヴァーチャルな側面を持つ役割語を会話練習に取り入れる点について、以下の4種類のコメントを得た。

まず、「ビジネス上の設定にするとキラーフレーズを提示しやすいが、それは本物なのか。役割語はイメージなのか」という導入する表現が現実に即したものであるかどうかについてのコメント、次に「役割語の練習がステレオタイプの定着につながる危険性があるのではないか」というステレオタイプを植え付ける行為に結びつくことに関するコメントや、「学習者になるであろうキャラクタ(例:就活生)を設定したグループと、非現実的な設定(例:敏腕プロデューサー)をしたグループがあったが、後者については練習の必要性にやや疑問が残る。」という意見の一方で「(就活生などの現実的な設定よりも敏腕プロデューサーのような)すぐに役立たない(=学習者の日常に直結しない)設定の方が楽しめた。」といった非現実的な設定を取り入れる適否についてのコメント、そして、「それぞれの学習者のなりたい像をクラスでどう集約するか」というクラスで共有することの難し

さに関するコメントである。

3-3. 考察

以上の体験セッションにおける成果物から、役割語を用いた授業デザインの応用の可能性と課題について考察を行う。

まず、3-2-1 節の「場所、ストーリー、人物」では、参加者は非常に職業や個性が明確な人物を想定した。従来の日本語教育における教科書では誰にでも通じる一般化された人物が主人公として登場するが、想定した人物の職業は「起業家」「金型工場の実習生」「添乗員」「プロデューサー」、などの従来の教科書には見られないものばかりである。また、学生であっても、就職活動中の学生であったりゼミ長であったり特徴が明確に示されている。性格においても「慎重」「まじめ」「円滑」「リーダーシップ」「敏腕」、などの語に示されるような個性派である。

次に 3-2-2 節の「モデル会話」では、「将来的に有効に使えるであろう台詞」という点に留意した結果、状況にふさわしい表現が多く示されたように思われる。例えば「お見せするほどのものではありませんが」(大したことはありませんが)、「無理は重々承知なのですが」(無理だとわかっていますが)、「把握してなくて…」(よく分かってなくて…)、「単刀直入に申します」(はっきり申し上げます)、などは、従来の教科書では同じ状況であってもやさしい表現(括弧内の表現)での指導が可能なため、敢えて指導して来なかったように思われる。この他にも「個性派」でありながら他の場面でも応用の利く、いい表現が多く挙げられた。

さらに、3-2-3 節の「ロールカード」においても「投資家への商品説明」「就職活動」「団体のレストラン予約」「人気キャスターへの番組依頼」、などのように、普段学習者が教室活動で練習しないと思われる場面や状況設定のロールカードが準備された。さらにそのロールカードを使って実演する際、非言語の部分にまで言及したグループが見られた。つまり役割語を取り入れることでクラス活動においてより本物に近いコンテクストを作り出す可能性を持っていると言えるのではないだろうか。

このようなことから、役割語を意識するだけで授業デザインに工夫がなされ、「場所、ストーリー、人物」においてはバリエーションが広がり、「モデル会話」においては表現が豊かになり、「ロールカード」においては場面や状況設定においてより詳細な状況や所作が設定されることが明らかになった。

また、3-2-4 節の「体験セッションにおける話し合い」から、今後の研究の観点を見出すことができた。導入する表現が現実に即したものであるかどうかという点では、実際に使用された表現とイメージされて作られた表現に差があるのかについて、今後の言語研究の必要性を感じた。

ステレオタイプを植え付ける行為に結びつくことに関するコメントや非現実的な設定を取り入れる適否のコメントについては、まず、本研究の実践は教室外で行われる実際の会話の中で学習者が状況に応じて自らの個性を表出させる表現を選ぶことができることを目指しているため、この点について学習者と基本方針の共有が行われていれば、問題にはならないのではないと思われる。次に、定延(2011:126)は、役割語を用いる発話キャラクターには「私たち」タイプと「異人」タイプがあるとしているが、本研究の実践のように、ビジネス経験のまったくない大学院生が、日本で働くビジネスパーソンとしての役割

語を学ぶ場合には、「私たち」タイプではありながら、ヴァーチャルな「異人」の要素を含むものになるかもしれない。しかし、両タイプはまったく別物ではなく連続したものであるため、そのスケール上の最もふさわしいレベルの役割語を選択していくのではないかと考えられる。さらに、定延(2011:175-177)は日本語学習者の発話例を紹介しながら日本語学習者にとって「品」「格」「性」「年」等の役割語の観点を取り入れた日本語教育がいかに重要であることを示しているが、本研究のような実践によってそれが可能になると思われる。

また、それぞれの学習者がなりたい像をクラスで共有することの難しさに対し、体験セッションのコーディネーターから「今後の日本語教育は不特定多数のための教材ではなく、特定少数のための教材を用意する必要があるかもしれない」というコメントがあり、役割語の観点を取り入れることによって、万人に通用する教材を用いた教育から今後は個々のニーズに即した個別化した教材を用いた教育への移行の可能性が示唆された。そのような教育を行うには「理想」とする話者の設定に限定すること、本研究の実践が行ったように学生がそれに同意することなどに留意する必要があると思われる。

4. 終わりに

以上のことから、役割語の観点を取り入れた授業デザインは、本研究の実践以外のデザインにも応用が可能であると言えよう。

本研究のオリジナリティの根幹は、本稿第2章で示した「立教モデル」の授業開発にあたって、ビジネス背景と留学生としての日本語学習経験を持つMBA課程の教員からの依頼にもとづき、企業幹部育成のための日本語教育科目と目的を特化したことで、どこでもだれにでも使える日本語、いわゆる「無難」(安心・安全)な日本語を脱却し、企業幹部として適切にふるまうための日本語を目指すという学習目標を設定したことにある。この方法が新たな日本語教育の授業デザインの例として役に立つことを願っている。

日本語教育は時代とともに変化する。役割語の観点を取り入れた授業デザインは、その変化に対応するための一つの指導法であると考えられる。

謝辞

体験型セッションに参加し、多くの知見を与えて下さった皆様に心より感謝申し上げます。本稿にも皆様の授業デザインをご紹介させていただきました。

参考文献

- (1) 栗田奈美・金庭久美子・丸山千歌・池田伸子(2013)「MBA取得コースにおけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試案—」『2013年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp391-392 日本語教育学会
- (2) 金庭久美子・栗田奈美・丸山千歌・池田伸子(2013)「MBA課程におけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試行—」『日本語教育実践研究』第1号 pp51-62 立教日本語教育実践学会
<<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/i7nobuko/gakkaishiv011.html>>(2014年9月16日)
- (3) 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- (4) 定延利之(2011)『日本語社会 のぞきキャラくり』三省堂